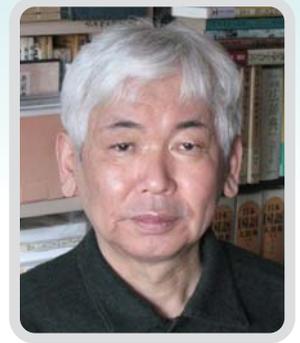


和刻本『世説新語補』の研究



二松學舎大学 文学部 教授
稲田 篤信

研究の背景

『世説新語』(5世紀、南朝劉宋の劉義慶撰)は、竹林の七賢や書聖王羲之など、後漢及び魏晋の名人の逸話を集めた名著として有名です。明代になって王世貞が宋元の人物記事を補訂して刊行した続撰書が『世説新語補』です。明の有名な思想家李卓吾の名を冠して「李卓吾批点世説新語補」とも称し、わが国では元禄7(1694)年と安永8(1779)年の2度にわたって京都の本屋・林九兵衛から和刻本(漢籍を日本で刊刻したもの)が出され、その後、本屋を変えて版を重ねています。中国では古典の姿を伝えていないと軽視されていた本が、わが国では尊重されてよく読まれていたわけです。私の研究はこの日本独自の受容史をテキストに即して考察することにあります。

研究の成果

和刻本『世説新語補』の元禄版が底本としたのは、明代の万暦14(1586)年序刻本です。ところが日本国内や北京、台北の図書館に所蔵されるこの系統の伝本を調査してみると、和刻本にそのまま合致する明版に行きあたらず、事情は複雑です。和刻本というのは必ずしも厳密な意味で翻刻であるとは限らず、最初から本屋のアレンジが加わっている可能性を示唆します。

和刻本『世説新語補』には、秦鼎『世説箋本』や恩田仲任『世説音釈』といった注釈書(図1)が刊行されているだけでなく、秋山玉山、服部南郭、太宰春台、千葉芸閣の4人の批注(批評と注釈)がまとめて書き込まれている本(図2)、また、石島筑波、那波魯堂、中井履軒、尾藤二洲など、当代を代表する学者たちの読書研鑽の跡がうかがえる書き入れ本が残っています。これらを精査すると、石島筑波ら江戸の荻生徂徠の門流の人々(諷園派)は『世説新語補』を好ん

で熱心に研究し、学問講釈のテキストとして用いたことや、反対に大坂の懐徳堂の中井履軒は『世説新語』で称賛される人物に対して厳しい批判をしていることなど、興味深い江戸学芸史の一面が浮き彫りになります。

また、台湾の国立故宮博物院図書文献館(図3)に所蔵される和刻本『世説新語補』は楊守敬(1839-1915)の旧蔵本ですが、この本には平賀中南(1722-92)『世説新語補索解』の注釈が詳細に書き込まれています。『日本訪書志』を著した碩学が興味を示して持ち帰ったものとして注目されます。

今後の展望

『世説新語補』と同様に、わが国独自の受容が展開された漢籍に『唐詩選』があります。両書には、『世説新語補』の安永版の「校正改刻」を担当した戸碓允明(1724-1806)や先の平賀中南など、共通した人物が関心を寄せています。今後、『唐詩選』、『世説新語補』の双方を視野に入れて受容史をたどり、日本近世文学に与えた影響や近世学芸史上の意義を論じたいと思っています。

関連する科研費

- 平成15-17年度 基盤研究(C)「漢籍の読書抄記—近世中期上方人文社会に即して—」
- 平成18-19年度 基盤研究(C)「和刻本の制作—近世中期上方における明清漢籍の受容—」
- 平成20-22年度 基盤研究(C)「批注の体例—近世中期上方における明清漢籍受容の展開—」
- 平成23-25年度 基盤研究(C)「『世説新語補』を事例とした近世日本の明清漢籍受容史の研究」



図1 上:秦鼎『世説箋本』
下:恩田仲任『世説音釈』



図2 千葉芸閣ほか書き入れた『世説新語補』



図3 国立故宮博物院図書文献館